
タイラント

銀蛸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイラント

【Nコード】

N0608U

【作者名】

銀蛸

【あらすじ】

成金の街『テスカロイド』に突如に現れた『新人類タイラント』を名乗る男、人造人間プラチナ。常軌を逸した能力で暴虐の限りを尽くし、世界を恐怖の渦に陥れるが、彼にはある秘密と、帰りを待つ家族があった。

ピコピコの森との同時掲載です

一章

ギルニア国・テスカロイドの街は鉄産業が盛んな地帯である。

鉱山には金銀が埋まり、日々一攫千金を狙う男達が、クワをひっさげ発掘作業に勤しんでいる。

副産物として同時に採れる宝石も貴重で、街中には商店街や鉄骨屋が立ち並ぶ。そこは活気に溢れている。

つまり、成金街だ。

金髪碧眼のこの男も、金を一発掘りあてようと、鉱山にやって来た一人だった。

身長は中肉中背。タフガイとは言えないが、頼りなさげとも言えない、普通の男である。

仲間も二人いる。ドレッドヘアの黒人と、やや小肥りの男。

「三人がかり、徹夜で掘り出せば、何個が見つかるだろ」

楽観的な観測を喋ったのは、ドレッドヘアの男。

「だよな？レオン」

金髪の男はレオンと呼ばれた。

「シバル、金銀はそう簡単に見つかる物じゃない。明らかに人数が足りない」

「雇えば雇うだけ分け前が減るだろ。少数精鋭って言葉を存じないのか？」

「それは昨日、君から教わった。出発支度の最中にね。僕がもう少し人数を集めよう、と言ったのも昨日だったな」

「やる前から何をゴチャゴチャと言ってたんだ？」

レオンはため息を吐く。

「黙って手を動かせっ」

シバルはレオンの肩を突っぱねると、自分もクワを持ち出して、近くの岩石を削り出した。

レオンは明らかに、見つかるはずのない宝の発掘作業が、嫌で嫌で

仕方ないといった面持ちだ。

もう1人いる。小肥りの男はパブスリックと言う。

近眼なのか眼鏡をかけ、遠巻きに彼らの発掘作業を眺めている。

「おい、パブ。お前も掘れよ」

「悪いなあ。用事があるんだ」

「用事？ 何の用事だ」

「腐れ縁。……2分で戻るよ」

パブスリックは言い残すと去って行った。

「誰だろう。親戚か？」

「腐れ縁だとか言ってたから、古馴染みだろ」

「鉱石場で見かけたのかな」

「だろうな」

シバルは作業を続ける。

レオンも黙りこみ、黙々と鉱石を掘り探る。

「なあ」

シバルがレオンに笑いかける。

「黄金を掘り当てたら、何に使う？」

「そうだな。妹の結婚式があるから、祝儀に充てる」

「馬鹿、貧乏性って言葉を存じないのか？ 数億単位で金が入るんだぞ。家でも買ってやれ」

「そうだな。確かに。で、お前は どうするんだ？」

「俺はそうだなア……まず、彼女とハワイに行くね」

ふ、とレオンが口を歪ませる。

「お前だって庶民的じゃないか」

「うるせえ、まずは豪快に使って、贅沢に遊んで、残りはデカイ家

を買って人生を満喫だ」

シバルは笑いながら作業を続ける。

ガシュン、ガシュンと無機質な作業音が響いている。そのうちに、

乾いた音が響いた。

レオンのクワが何かにぶつかったのだ。訝しがる彼はそつと内を除き込む。

「おい、シバル」

問いかけに反応したシバルは、嬉しそうに近寄った。

「なんだ、もう出たのか!？」

「いや違う。機械かな」

「機械？」

二人で謎の物体を眺める。

確かに機械の様だ。電線で何度か巻き付けられた、長い長方形。泥に汚れているが辛うじて、本体の岩石色が浮かびあがっている。

「……なんだろう？」

瞬間。

凄まじい閃光が辺りを包んだ。

けたたましい轟音と同時に、周りの砂煙が吹き上げられる。

レオンは目を開けていられなくなった。

泥色の地面は瞬く間にオレンジへと変色し、宙に吹き上がるように爆風が辺りに飛び交った。

自身の四股が引きさかれる感覚。

レオンは悶える間もなく、気を失い、意識は闇へ溶けていった。

——ここはどこだ。

視界に何も映らない。匂いも肌の感覚も感じない。

自分の身体じゃない、宙に浮かんでいるような、水に沈んでいくような……。

何故俺はこんな場所にいるんだ。

目が醒めると、白いタイルで覆われてた天井が見えた。
天井だけではなく、辺り一面真っ白だった。

地平線が消え失せたように、どこまでも続くような、純白に染まった部屋。

その中央のベッドに、『彼』は横たわっていた。

——ここは何処だ。俺は何故こんな場所にいる。

——……いや、それより。

ドアの閉口音が鳴った。

「目は醒めたかな」

老人だ。

白衣に身を包んだ眼鏡の老人。

いかにも理系に詳しい、部屋にこもりきりで研究を重ねたような、老化した身体。

老人は『彼』に近づき、尋ねた。「気分はどうか？」

『彼』は答える。

「優れません」

「どう悪い、身体に不調はないか？ 手足は動くか？」

「何も思い出せません」

『彼』は言葉を続けた。

「何故ここにいいのか、俺は誰なのか、名前は何なのか、思い出せません」

言葉を聞くと、老人は満足げに顔を歪ませる。

「それでいいんだ。何も覚えていなくて」

「光に包まれた気がします。巨大な光に」

老人は白衣のポケットから、いくつかの錠剤を取り出した。

「これを定期的に飲みなさい。そうすれば、不快な気持ちもなくなる」

『彼』は黙って、包装を破り錠剤を喉に放り込んだ。

「……」

「落ち着いたかな」

「はい」

「では、立ちなさい。研究所を案内しよう」

老人は彼の手を取り歩き出した。「私はパズム博士だ、本名はパズムミルク・ローガズ。ここで研究をしている」

白い部屋を抜けて、閉鎖的なパイプや銅線が乱れる廊下を歩く。

『彼』とパズム博士は研究室にたどり着いた。

「ここで私は研究をしているんだ。随分長い間」

バイオ溶液の入った観察用フィルターを、博士は愛でるように撫でる。

「人を理解するためには、細部に至るまで知識を得ることが必要だ。目を閉じて、筋肉構造や、神経や血管がどこにどう繋がれているかもね」

博士は話を続ける。

「考えてみたまえ。人間は機械だ。長く利用することで情報を蓄積させ、またパーツを消耗させ、死に至る。すなわち故障する、ならば分解して、配線を組み換え、新たな技術でバージョンアップさせれば、人間はさらなる世代へと進化出来るのではないか」

闊歩し『彼』に部屋を案内する。

「機械はそうやって進化してきた。だが、第2の機械である人間は科学への恐怖から、人権と呼ばれる驕った思想を掲げ、『人を産み出すのは神への冒瀆』とバッシングする。神などいるものか」

博士は熱っぽく、そして怨差を込めて語る。

「人類は自ら進化の可能性を絶った。だが、私は違う。研究に研究を重ねた。実利だけを追求した。道徳を恐れず、道を模索した、そして作り上げた！」

博士は歓びに震え『彼』を見つめる。

「それが君だ、プラチナ。君こそが新しい人類『タイラント』だ」

「……タイラント」

『彼』は虚ろな目で博士を見つめる。

「そうだプラチナ。君は人類を超越した。素晴らしい理想体だ。新人類、いやいや、そんな言葉では覚束ない。例えるなら、全ての始まりは君だ」

「わたし、から？」

「君は地球にとってのビッグバンだ。全ては君から始まり、君から誕生が始まる。礎だ」

「……」

プラチナは黙り込む。

「君の胸に埋め込んだボックス、赤く光っているだろう？　それが君が『礎』たる証しだ」

プラチナの胸に心臓の鼓動に応じるように、赤いランプが鈍く点滅している。

「長かった。実に長かったが、遂に成果を産み出すことが出来た。私の人生に価値が誕生した。今、この瞬間に……」

「説明しよう、君の身体能力は常軌を逸している。右腕に小さなレバーがあるだろ？」

プラチナは自分の右腕を眺めた。確かに四角いレバーがついている。「これを押しながら捻る。そうすれば安全装置が解除され、とてもつない能力を発揮することが出来るんだ」博士は興奮した面持ちでプラチナの肩をポンと叩く。

「口で説明しても分からない、そうだろう。プラチナ、ついて来なさい。君は自分の能力を知る必要がある」
プラチナは頷いた。

「私が最も幸福だったのは、故郷がテスカロイドという鉱山街だったことだ」

博士とプラチナはエレベーターに乗っていた。

博士の後方に位置したプラチナは終始どこを見てもなく、自失した眼差しで柱の様に立っている。

「お陰で資源には困らなかった。ゴロつきは金さえ払えば、なんだってこなす。だが、その側面酷い目にもあった」

過去を振り返り博士は述懐する。「貧富の差が激しいのだ。商業街付近は当然だが、売る者と売られる者の区別、それがハッキリしてくる。何人もの友人が、そのいざこざに巻き込まれて死んだ。半世紀は前の話だがね」

博士はプラチナに振り返った。

「君を産もうと思ったのは、その経験もあってだ。死んだ友人は、私に非常に多く勉強をさせてくれた」

「……」

「プラチナ。君は新しい概念となる。この街にとって恐ろしいほど重要な概念だ」

——プラチナ。

「……」

「私は君を息子のように思っているよ。出来のいい息子だ」

「息子」

「私を父と呼んでも構わない、プラチナ。それほど君を溺愛してるんだ」

「父……」

プラチナの瞼がピクリと跳ねる。だが一貫して無表情の彼は、博士の言葉に答えた。

「父さん」

「プラチナ。私が父さんだ」

博士は感極まり、非常に飲む。

「さあ、もうすぐで地上に到着だプラチナ。順序を覚えておこう」

テスカロイドの街は騒然となった。全裸の男が現れたからである。見るからに逞しい身体、臆面もなく歩く姿は変質者と呼ぶに相応しい。

時期も時期であり、休日続くテスカロイドは人通りも多い。

「ちよつとやだ……っ」

「なんだありや？変態だぞ」

「鉱山の煙で頭をやられたんだ」

「見るよあの顔。なんか悟ってるぜ」

蜘蛛の子を散らしたように騒ぎ立てる住民。そのうちに黒いジャケツトを覆った男が、仲間をつれて変質者の近くに寄り添った。

「おい、なんだお前。いい身体してるなア」

「ヌーディストビーチならここにはないぜ」

「はい父さん」

変質者は脈絡のない返事を返す。

男達はたまらず笑い転げた。

「父さん、父さんだと」

「迷子になっちまったんだよ。可哀想に」

「始めます父さん」

変質者が呟いた。

その瞬間、ドツという音と熱風、同時に波線が周囲を揺るがす。地響きが鳴る。

凄まじいエネルギー量だった。

男達の身体は脆く崩れ、たちまち砂煙のように消え失せた。

空気全体が揺れている。核爆発の様な激しい振動と地鳴りは、テスカロイドの街を包む。

建物は崩壊し、人々は一瞬で肉と骨が分離される。

プラチナを中心に、テスカロイドはドミノ倒しの様に削れていった。

テスカロイドはまるで、戦争跡地の様な、無残な姿を晒した。

『素晴らしい……素晴らしいぞ』

プラチナに付けられたイヤホンから、博士の声が聴こえる。

街を破壊しろと命令したのは、彼だ。愉悦と驚嘆に満ちた声色だった。

「簡単な波動砲で、ここまで街を壊滅できるとは。まさに無敵、無敵じゃないか……」

プラチナは面白くもなともない、というより——感情を喪失した廃人の様な面持ちで——博士の声に耳を傾けている。

「今のはな、プラチナ。君の内部にセットされている『トリマヌ』と呼ばれる核物質の分裂反応を利用して、……ひたらく言えば核爆弾だ。但し放射線の放出は、かなり抑えてある」

博士は原理を説明し、後の指示をする。

「東に行きなさい、プラチナ。確か軍の駐屯地があったはずだ。軍人どもに挨拶してやろう」

「はい父さん」

プラチナは頷いた。そして、自ら足を変形させると、空高く飛びあがり、高速でその姿を消した。ギルニア国には軍駐屯地が存在した。国家との戦争ではなく対マフィア制圧の為の兵士である。

前述の通り、テスカロイドは宝石街なので治安も悪化していた。

「……なんだ、あれは」

一兵卒が空を見上げる。

突如、雲の隙間から猛烈な速度でこちらに向かってくる物体を発見したのだ。

『全体に告ぐ。謎の未確認物体が接近中。ミサイルの可能性大。至急迎撃』

サイレンが響いた。

「急げ、早くしろ」

兵士達が群がり、常備してある対空ミサイルの照準を合わせる。

「……？」

対象を確認した兵士は訝しがる。

「……人間！？ 人間じゃないか！？」

人間が宙を飛び、こちらに向かってくるのである。いつまでもなくプラチナだった。

「発射体勢整いました。――3、2、1」

「待てッ、撃つな。相手は人間だ」

「えっ？ うわっ！」

制止遅く、ミサイルは爆発音と同時に高速で跳ねあがった。同時にプラチナへと急接近する。

見事に空中で正面衝突した。

――が、プラチナは傷ひとつつかず、悠々と空中を滑空した。速度も衰えるどころか加速していく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0608u/>

タイラント

2011年10月9日09時03分発行